

令和元年度 自己評価書及び学校関係者評価書

令和 2 年 3 月 18 日
札幌市立 星置中学校

1 本年度の重点目標

確かな学力の定着と、生徒の自立意識、思いやりの心を育てる学校づくり

2 本年度の経営方針

- (1) 教育課程の適切な実施と教科指導のさらなる工夫・改善を図る。
- (2) 「わかる」「できる」「楽しい」授業を構築する。(課題解決学習の推進、T T 授業の充実等)
- (3) 細やかな生徒理解につとめ、積極的な生徒指導を展開する。(教育相談、キャリア教育の実践等)
- (4) 学級・学年づくりを基盤とした、自主的、自立的な生徒会活動を展開する。(リーダーの育成、ねらいを明確にした学校行事等)
- (5) 保護者、関係小学校、地域社会との連携をより深める。(相互理解、相互信頼などの関係づくり等)

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

【評価の方法】

○ 自己評価の達成状況の数字は、教職員による学校評価アンケートの集計結果であり、下の A～D の 4 段階で評価した人数を 5 段階で表した。(A : 5 点、B : 4 点、C : 2 点、D : 1 点)

[A よくあてはまる B ややあてはまる C あまりあてはまらない D まったくあてはまらない]

また、達成状況下段の () 中の数字は、昨年度の数字である。

自己評価の達成状況は、**A** (十分である) : 4. 5～5. 0

B (概ね十分である) : 3. 0～4. 4

C (不十分である) : 2. 0～2. 9

D (改善を要する) : 1. 0～1. 9 とする。

○ 反省と改善の方向性の内容は、教職員による学校評価アンケートや保護者・生徒へのアンケート、反省職員会議の結果及び 1 年間の業務遂行状況を勘案し、自己評価したものである。

学校関係者評価 (自己評価の適切さ・改善策の適切さ)

A : よくあてはまる、十分達成されている

B : だいたいあてはまる、おおむね十分である

C : あてはまらない、不十分である

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
重点目標	学校教育推進の重点は学校や生徒の実態から見て適切であった。	A 4. 5 (4. 5)	学校教育推進の重点は的確であった。現状に満足することなく、重点目標を保護者・地域に発信していく。	A	A
	教育推進の重点の内容に関して、全教職員の共通理解が図られ、学校内外に周知されている。	B 4. 4 (4. 3)	職員会議等を通して、重点内容の共通理解を図ることができた。教育推進の重点の確認を定期的に行い、学校運営に努めていく。		
	教育推進の重点項目は適切で、具体化され連携、協働体制が図られている。	A 4. 5 (4. 4)	重点目標達成のために校務・学年が具体的な目標と計画を設定できた。今後にもさらに研鑽を重ねていく。		
学校関係者評価委員による意見	・開校 20 周年の節目にふさわしい重点であり、学校・家庭・地域が関わりを深める手立ても具体的であった。				

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学習指導	生徒に気づかせ、育てる授業を行うなど、生徒を主体とした授業を実践できた。	B 4・0 (4.0)	生徒が主体的に考える授業づくりが今後の課題である。思考力を育む授業改善に取り組む。	A	B
	基礎・基本の定着を図るための授業の工夫・改善を行えた。	B 4.0 (4.1)	「個に応じた指導の工夫」の成果が現れているが、基礎・基本の定着の判断が明確ではない。今後も観点別標準学力テスト・学習アンケートを実施し、学力把握に努める。		
	生徒一人一人の良さや可能性を伸ばす授業を実践できた。	B 4.1 (4.0)	今年度も数教科で少人数指導を実施した。少人数指導とTT指導についてその指導形態についての検討が必要。		
	生徒・保護者が納得できる評価・評定を行えた。	B 4.2 (4.4)	評価・評定については、教職員の評価が下がっている。生徒・保護者からはおおむね的確であると評価を受けているが、今後教科の枠を超えた評価法の共通理解を図り、信頼性と妥当性を高めたい。		
学校関係者評価委員による意見	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ力の育成については、小学校でも同様の課題が浮き彫りになっている。ぜひ小中一貫教育の取組を通して改善されていくことを期待する。 ・学習意欲を高め、子どもたちのために今後も指導力向上のためにご苦労されますよう期待します 				

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
生徒指導	指導の中ですき間をつくらぬよう協力・連携することができた。	B 4.3 (4.3)	学年・学級において協力・連携を意識した生徒指導を実践できた。さらに共通理解をはかり、きめ細やかな指導を目指していく。	A	A
	受容・共感的な態度で接し、生徒理解に努めることができた。	B 4.3 (4.4)	学年による違いも多少あるが、おおむね目標を達成している。保護者アンケートでの評価は昨年よりも高い。さらに情報の共有に心がけ、教育相談活動の充実を目指していく。		
	事故の情報の綿密な交流を図り、共同して指導を行えた。	A 4.5 (4.6)	情報の交流や共有については、おおむね達成できたが、今後はさらに綿密な交流を目指したい。特別支援学級との連携も強化できた。次年度も継続して行っていく。		
学校関係者評価委員による意見	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身が自分の生活を見直し行動を変えていける様に指導されているようです。 ・日常の生徒たちの表情、作法など、どれも素晴らしい。明るく素直な気持ちが伝わってくる。 				

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
心を育てる教育	諸行事・諸活動を通し、豊かな心を育むことに努めた。	B 4. 4 (4. 1)	諸行事・生徒会活動を通して所属感と思いやりの心を育むことを意識した。今後さらに主体的な取組を計画する。	A	A
	諸行事・日常生活の中で、強い意志・実践力を育てられた。	B 4. 0 (3. 8)	生徒の達成感が前年度よりも高く、諸活動が実践力の育成にはつながっているが、「強い意志」の育成について課題が残る。今後は自ら課題を探究し自主的に取り組む姿勢を育んでいく。		
	奉仕活動や当番活動を通し、思いやりの心や勤労意識に対する関心を育てられた。	B 4. 1 (4. 3)	当番活動などの勤労意識が年々下降傾向にあるのかもしれない。生徒会活動や部活動においても勤労意識が育まれているが、今後は活動のマンネリ化を防ぐとともに、全生徒に浸透させるための指導の工夫を継続していく。		
	道徳の時間を通し、いじめや不登校、命に対する指導を行えた。	B 4. 4 (4. 3)	各学年とも道徳の時間を活用し、「思いやりの心」を育む指導を行うことができたが、また今年度は計画的な取組を進めることができた。道徳の教科化に向けて、その内容項目を把握し、評価についての検討を進めていく。		
学校関係者評価委員による意見	・心を育てる教育は家庭（父母）の協力も必要だと思いますが、なかなか難しいです。				

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
組織・研修	校務・分掌間で円滑が図られ、有機的に機能していた。	A 4. 6 (4. 2)	各校務部間において、円滑な連携が図られた。さらにきめ細かな対応ができるようにしていく。	A	A
	各学年・学級の運営方針が具体的に実践されていた。	A 4. 6 (4. 3)	各学年が経営方針や指導目標に準じておおむね実践できた。今後はより具体的に実践していく。		
	校内や教科での研究・研修が充実しており、実践されていた。	B 4. 3 (3. 9)	校内研修では、授業公開を行い、教科指導について研鑽を深めることができた。今後は研究成果を日常の授業実践に具体的に生かしていく。		
	評価基準・方法が適切に説明され、情報として提供されていた。	A 4. 8 (4. 4)	「教育課程説明会」や「評価・評定資料」を配布し、適切に説明できた。年度当初に評価に関して具体的な計画を提供し、また検証することもできた。		
学校関係者評価委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・達成状況が前年度より大きく伸びてる、重点目標、具体的方策・組織（分掌・意識）が連動して教育活動が展開されていたことを裏付ける結果である。 ・幅広い年齢層の教職員組織において、それぞれの世代の先生方が自己研鑽に励み、その持ち味を十分に発揮できる組織にしてほしい。 				

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	反省と改善の方向性	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
地域との連携	地域の特色を生かした教育活動を行えた。	B 4. 3 (4. 3)	「総合的な学習の時間」や「キャリア教育」を通し、適切に行えたが、広報活動が不十分であった。地域の人たちと交流を深められるように、中味を精選していくとともに、その取組を発信していく。	B	A
	関係諸機関との連携を適切に行えた。	B 4. 7 (4. 4)	関係諸機関と積極的な連携を図れた。小中連携の取組については、新たな連携の形態を模索していきたい。		
	家庭への連絡をきめ細かく行い、家庭との連携が図られた。	A 4. 5 (4. 6)	生徒や保護者からの賛同も高い。今後、も家庭との連携が行えるように工夫し、努力していく。		
	学校便りなどが地域に配付され、教育活動への理解が図られた。	A 4. 6 (4. 6)	学校だよりを滞りなく配付できた。紙面も見やすいものを心掛けた。学校ホームページでは、更新の頻度を多くすることができた。特に緊急連絡で HP を活用したのは効果的であった。今後も地域に開かれた教育活動を進めていく。		
学校関係者評価委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒がボランティアとして地域の方とともに、企画・運営に参加していた取組は高く評価できる。 ・指導時間に制約のある中で地域との連携を直接深めるのは大変かと思います。可能な範囲で、行われればと思います。 				